

島民の自発的な活動による、地域資源の魅力発信と保全をめざして  
Aiming to preserve and promote the charm of local resources  
through the voluntary activities of island residents

香川県立小豆島中央高等学校 3年4組  
石井夢奈 今城杏 竹田有晴 藤田夏菜子

## 1. 研究背景

私たちの住む小豆島は、瀬戸内海で淡路島に次いで大きい、人口が約 26000 人の島である。人口は減少の一途をたどっているものの、恵まれた自然と豊かな伝統・文化をもち、その地域資源により「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」に選出されている(小豆島町役場商工観光課、2021)。しかし、小豆島に住む私たちは地域の魅力を認識できておらず、この選出に疑問を感じていた。そこで行政機関に取材すると、私たちが知らないだけで行政機関は多様な取組みを講じており、特に観光がもたらす地域への経済効果や伝統文化の保全について、GSTC(Global Sustainable Tourism Council、2019)の示す基準で高く評価されていることが分かった。しかし一方で、地域住民のマネジメントへの参画や自然環境の保全に課題があることも分かった。その原因としては、島民が活動に非協力的なことや環境保全に無関心である点(イベント時に排出される多くの投棄ゴミ等)が大きく、行政機関は島民自身が地域資源の魅力発信や自然資源を保全する役割を担うことを期待している。地域の持続可能な観光地として成功した例を調査すると、岩手県の釜石市が市民全体によるまちづくりを掲げ、「オープンシティ戦略」を実施していた。これは、市民一人ひとりが主体的に環境づくりを行うことで、持続可能な社会の形成を目指したものである(釜石市総務企画部総合政策課、2020)。このような取り組みから、釜石市はグリーン・デスティネーション・アワード「シルバー賞」を受賞している。このことから、やはり「魅力の発信・保全」の役割を島民が担おうという意識の醸成は重要であると考えられた。また、17年間育ててくれた場所だからこそ、私たちの手で解決していかなければならないという思いが強くなり、「(1) 地域資源の魅力発信」、「(2) 自然環境の保全」という2側面から、島民の意識改革を行う本研究に乗り出した。

## 2. 研究目的・意義

本研究は、島民全体が地域資源の価値を理解して、その発信・保全の役割を担う「理想の小豆島」の実現を目的としている。そうすることで地域資源の魅力の発信・保全がより効果的になることはもちろん、島民の観光に対する理解が進み、観光が活性化することで生じると予測される、島民と観光客との軋轢も抑えることができると考えている。また、「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」に選出されることは、持続可能な観光地としての最初の段階であり、国際認証団体の一つであるグリーン・デスティネーションズは、さらに段階的な上位区分を設定している(国土交通省、2020)。本研究がその上位区分におけるブロンズ賞以上の受賞に貢献することで観光地としての価値を上げ、より小豆島を活性化させることができるとも考えた。豊かな自然や伝統文化を保有するだけでなく、それらを持続的に発信・保全できる次世代型の観光地として、小豆島を盛り上げたい。

## 3. 研究方法

本研究は、以下のような手順で実施した。

- (1) 「地域資源の魅力発信」を島民が担うための仮説を設定し、その有効性を検証する。
- (2) 「自然環境の保全」を島民が担うための仮説を設定し、その有効性を検証する。
- (3) 得られた結果から仮説の再検討を行い、新たに実験する。
- (4) これまでの活動成果を鑑み、目的の達成が期待できる仮説の提案を行政機関に行う。

## 4. 結果・考察

### (1) 『おさんぽ BINGO—小豆島—』を開発、活用することで地域の魅力を再認識してもらえるのではないかと

現代においてはInstagramやXをはじめとするSNSが普及しており、地域住民が地域のイベントや取組みについて知ることや、地域資源の魅力を発信することは容易である。しかし、実際は行政機関の企画する多様な取組みへの参画や島民による地域資源の魅力発信は少数にとどまっている。この原因は、島民が私たち同様、地域の魅力に関心をもてていないことにあるのではないかと考察した。そこで、島民が地域資源のどのような点に魅力を感じているか調べるため、無作為に選んだ地域の大人 55 名に対してアンケート調査を行った。アンケートは、“小豆島の好きなところ”、“小豆島で一番気に入っている場所”という2項目で実施している。その結果、“小豆島の好きなところ”では、代表的な観光地である寒霞渓や特産品であるオリーブに次いで「特にない」が約2割を占め、“小豆島で一番気に入っている場所”では、「自宅」や「職場」といった地域資源とはつながらない回答が4割以上となった。このことから、島民は地域資源の魅力に強い関心は抱いておらず、その認識は浅いと判断した。地域資源の魅力を強く認識できれば、マネジメントへの参画やSNSによる魅力の発信が見込める。そこで、「島民が地域資源の魅力を再認識すること」に重点を置き、その解決策として上記の仮説を設定した。

### 【おさんぽ BINGO とは】

『おさんぽ BINGO』は、「いつものお出かけをもっとたのしいお出かけに！」をコンセプトとした移動式ビンゴゲームで、広告制作会社サン・アドによる文具ブランド『ブンケン』によって開発された。普段の見慣れた景色を新たな視点で見ることができると、地域資源の魅力を再認識するツールとなり得ると考えた。また、このおさんぽ BINGO を用いた「自分のまちの『おさんぽ BINGO』を作ろう」というプロジェクトが、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市にて、地域の良さを多くの人に直してもらおう目的で実施されている(3710Lab、2019)。このように、実際に地域の活性化に使われた実績もあることから、島民が地域の魅力を再認識するためのツールとして『おさんぽ BINGO—小豆島—』の開発を検討した。



↑おさんぽ BINGO®(3710Lab、2019)

【『おさんぽ BINGO—小豆島—』の開発における工夫】

みなとラボ(3710Lab)に協力を仰ぎ、公益財団法人日本財団の助成を受けて開発を行っている。



↑実際の商品  
ビンゴカード2枚とガイドブック1枚付

- 五感で小豆島を感じることができる  
…「船の汽笛」や「醤油の香り」など、視覚だけでなく五感全てをつかって地域を感じられるようにした。また、「トンビ」や「カニ」などのアイコンで上下様々な方向に視点が動き、地域の自然資源の魅力を感じられるようにした。
- 一年間を通して楽しめる  
…特定の季節でしか見られない風景をアイコンに組み込むことで、一年間を通じた地域の変化を楽しめるよう工夫した。
- 多様な視点の導入  
…開発に際して島外の方の意見を積極的に集め、島民が普段意識していないような何気ない地域の魅力をふんだんに採用している。

【『おさんぽ BINGO—小豆島—』の成果と課題】

開発した商品の有効性を検証するため、企業への持ち込み、マルシェでの販売を行い、商品に対する意見を調査した。また、購入者に使用後の感想を取材した。

企業への持ち込み (対象 15 社)	マルシェでの販売 (対象 55 名)	購入者への事後取材
<ul style="list-style-type: none"> <li>・15社に持ち込み、12社が購入</li> <li>・「見た目から意図が伝わらない」という意見が多数</li> <li>・誰をターゲットとしているか分からないという意見が多数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取材協力 55 名、うち 41 名が購入</li> <li>・購入者の 6 割が親子連れで、「子どもとの散歩のため」と答えた</li> <li>・購入しない理由の多くは、「地域のことは熟知しているから」だった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「地域の魅力に気付かされた」、「子どもとの散歩が楽しくなった」等の肯定的意見が多数</li> <li>・「使ってみて初めて意図が分かる」という声もあった</li> </ul>

購入者への事後取材で得られた内容から、『おさんぽ BINGO』は地域の魅力を再認識するためのツールとして有効であると考えられる。しかし、その意図が伝わりにくいという側面が強く、手に取ってもらえないと効果を発揮できない。そのため、その効果を波及させるための手立てが必要であると考えた。また、「地域のことは熟知している」と考えている人たちに、新鮮な視点で地域を見る機会を与えたいと考えた。

(2) 有人ゴミ収集所 (エコステーション) を設置することで自然観光の保全を醸成できるのではないかと

行政機関への取材から、環境保全の問題の中でも、特にゴミ投棄の問題に課題を感じていることが分かった。あるイベントでは、当日参加者から集まるゴミの量が 4 トン、翌日の清掃活動で運営側が集めるゴミが軽トラック 1 台分にも及ぶ。加えて、不溶性のゴミが海に捨てられていたり、可燃ゴミ、不可燃ゴミが分別されずにまとめて捨てられていたりする。これらは島民の環境保全に対する意識不足の表れであると考えられる。投棄されたゴミは、その状態から無価値物として処理されることが多く、小豆島の処理場に埋め立てられている。(土庄町、2022) 処理場はすでに満杯で、新たな処理場が供用されており、小豆島の環境破壊を促進している。このことから、島民がゴミ投棄の問題に注目し、分別するような仕掛けを施す必要があると考え、上記の仮説を設定し、「イベント時における有人ゴミ収集所 (エコステーション) の設置」を行政機関に提案した。以下のような工夫を取り入れている。

- ① イベント中央部にゴミ収集所を設置する  
→広いイベント会場のどこにいても、ゴミ収集所の場所を確認できる。
- ② 有人にし、分別の呼びかけを行う  
→1時間おきに呼びかけを行いゴミ問題への意識向上や分別の徹底をねらう。
- ③ 10種類の分別とラベルの作成  
→イベントに合わせた10種類の分別方法を提案。  
イラスト表示のラベルを作成し、遠くから見た場合や子どもが見る場合に合わせて上下に分別表示をつけた。

燃えるゴミ	串・割りばし	発泡スチロール	飲み残し	食べ残し
多様なゴミをひとまとめにして捨てる人が多いため、常に人がいる状態を保つようにした。	最後は燃えるゴミとしての処理となるが、ゴミ袋の破損や嵩張りを避けるために分別した。	洗浄することで、島内リサイクルセンターで加工し、有価物として売却する。	海への垂れ流しを避けるため、高吸水性樹脂で吸水し、燃えるゴミとして処理を行う。	最後は燃えるゴミとしての処理となるが、ゴミ袋内に水分等が入ることを避けるため分別した。

ペットボトル蓋	ペットボトル	缶	ビン	燃えないゴミ
ペットボトルを効果的にリサイクルへ回すため、ペットボトル回収の隣で分別を呼びかけた。	洗浄することで、島内リサイクルセンターで加工し、有価物として売却する。ペットボトルのラベルや飲み残しがないかの確認を行うよう呼びかけた。			島内処分場にて埋め立て。



↑分別表示の例

## 【活動の成果】

当日参加者から集まるゴミは2トン以下に減少、また翌日の清掃活動で運営が集めるゴミも45リットル袋1袋半に収まり、投棄ゴミの減少が目に見えて確認できた。加えてペットボトルや缶、ビンなどの無価値物と扱われていたゴミの量が減少し、集められたもののほとんどが有価物としてリサイクルできた。またイベント時は多くの年代の人が一度に集結するという特性を活かし、自然資源の保全について多くの人に訴えることができた。家族や友達と一緒に楽しんで分別をしている姿が多く見られ、ゴミ問題に対する意識が向上したと考えている。行政機関にも評価され二度目の「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」選出に貢献できた（小豆島町役場商工観光課、2022）。現在では、小豆島で行われる多くのイベントにおいて、この有人ゴミ収集所が導入されている。しかし、有人ゴミ収集所はイベントという限定された時間しかその効果は発揮せず、島民の環境保全への意識を日常的に醸成する取り組みとしては不十分であることが課題である。



↑小豆島まつり(2022. 8. 15)



↑オーリーブマラソン(2023. 5. 21)

## (3) 仮説の再検討を踏まえた新たな提案

(1)、(2)の結果から、以下に重点を置いて仮説の再検討を行った。

- ・おさんぽ BINGO の意図を実感できる仕掛けづくり
- ・大人に新鮮な視点で地域を見てもらう仕掛けづくり
- ・日常のゴミ投棄問題に目を向けてもらう

そこで新たに提案したのが、次のようなおさんぽ BINGO イベントの実施である。

### 『おさんぽ BINGO ツアーイベント』

企画趣旨：親子でおさんぽ BINGO を使って地域を散策するイベント。参加者の年齢に合わせたコースを設定し、ツアーのようにガイド役が地域の魅力を紹介しながら行う。親は30～40代が多く、実際に地域を支えている世代であることと、取材の際「子どもの遊び場が少ない」という声が多く聞かれたことから需要があると判断した。おさんぽ BINGO をガイドブックとして利用することに加え、小さな子どもと散歩することで、普段見過ごしてしまうような何気ない地域の魅力を再認識することが期待できる。また、道中でゴミ拾いを行うことで、小豆島のゴミ投棄問題をより身近に感じてもらうことができるようにする。

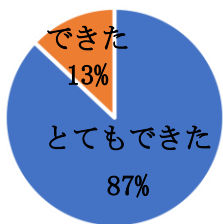


イベントの有効性を検証するため、対象地域を2つの地域に絞り右のような形で実験的に行った。運営スタッフを確保するため、高校生にボランティアとしての参加を呼び掛けている。イベントには、23組51名の親子が参加した。また、行政機関や非営利組織が運営として協力してくれたため、延べ80名が参加するイベントとなった。

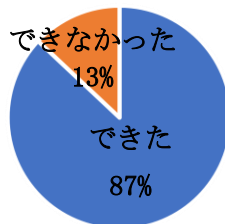
### 『おさんぽ BINGO ツアーイベント』の結果【親24名が対象】

以下は、参加者に対して行ったアンケートと聞き取り調査の結果である。

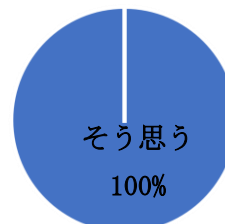
#### ① アンケート：単一選択形式の質問項目に関する結果



イベントを楽しむ  
ことができたか



地域の新たな魅力に  
気がつけたか



おさんぽ BINGO を他の人に  
紹介したいと思うか



#### ② アンケート：自由記述形式の質問項目に関する結果

- ・ゴミ拾いを行うことについての項目では、「初めてゴミの多さに気づいた」「楽しく地域をきれいにできて良かった」等肯定的な意見が多く得られた。
- ・イベント全体についての項目では、「地域の魅力に改めて気がついた」「子どもに地域の良さを教えてもらった」「友人を誘ってまた参加したい」等の声が寄せられた。
- ・ビンゴのアイコンが対象地域と合致しておらず、あまり穴を開けることができなかったという声があった。

#### ③ 聞き取り調査

- ・活動中の聞き取りで参加目的について調査すると「島には子どもとの遊び場が少ないので参加してみた」という声が多く聞かれた。アンケートの自由記述でも「何気なく参加したが～」などの記述が多数見られ、地域に強い関心がなくても、子どもとの遊び時間確保のために参加した人が多くいたことが分かる。
- ・周知期間が短く、「周りの仲の良い家族を誘えなかった」という声が上がった。

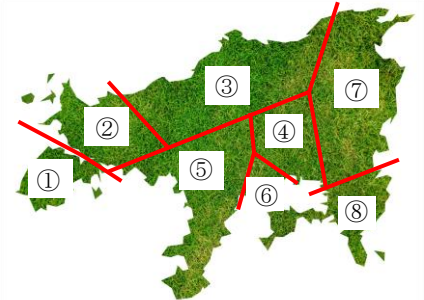
## 【『おさんぽ BINGO ツアーイベント』における考察】

アンケート結果から、本イベントは「島民が地域の魅力を再認識する」「日常のゴミ投棄問題に目を向ける」という目的を達成するための有効性は高いと言える。また全員がおさんぽ BINGO を他の人に紹介したいと回答し、楽しかったという声が多く寄せられたことから満足度は高かったと考えられ、コースを多様に設定すればリピーターが期待できる。他者を誘ってもう一度参加したいという声が非常に多く聞かれたことから、新規参加者も見込めると考えた。

一方で、実施時期が12月の寒い時期で日も短かったことや、周知期間が短かったことが課題として挙げられ、それらの見直しが必要であると感じた。また、現在の『おさんぽ BINGO—小豆島—』は小豆島全体を対象としており、コースによってはビンゴカードがなかなか開けられないという事案が発生した。このようなアイコンと実施エリアの不一致が課題であり、実施エリアや時期に合わせたビンゴカードの開発も必要であると考えられる。

## 5. 結論及び今後の展望

ここまでの実験結果と参加したコンテスト（一般社団法人 Glocal Academy、2024）での指摘を踏まえ、イベントにさらに改良を加えた。各地域の島民がより参加しやすくなるよう、小豆島を8エリア（下図）に分割した。このエリアは、地域ごとの幼稚園、小学校の就学児童数を考慮し、今回の実験対象地域の就学児童数と概ね同程度になるよう設定している。そのため、親子の参加者については、分割した各エリアで実験と同様の参加数が期待できると考えている。今回の実験で1回（午前・午後）につき23世帯の参加があったことから、各エリアでの実施で約180世帯の参加が見込まれる。また、今回一世帯あたり2.2人の参加であったことを加味すると、年間約400人への波及効果が期待できる。さらに、改良したイベントの運営は地域おこし協力隊や、NPO 法人に加え、中高生ボランティアの協力により行う予定である。これにより、より多くの島民がイベントに関与することとなる。リピーターも見込めることから、コースをリニューアルしながら、5年、10年と長期的に実施することを考えている。また、ターゲット層を3つに拡大し、年10回の開催計画を以下のように立てた。



- ①土庄・戸形地区 ②四海・湊崎地区
- ③大鐔・北浦・大部地区 ④草壁地区
- ⑤池田・二生・三都地区 ⑥西村地区
- ⑦福田・安田地区 ⑧苗羽・坂手地区

### 【ターゲットと参加者に提示する目的と開催時期】

ターゲット	参加者に提示する目的	開催時期
① 親世代 (年8回)	・遊び場の少なさや同じ遊歩道を反復することで起きる親子時間のマンネリ化を解消する。	・全期間（1・2・3月を除く）に加え、特に長期休暇に多く行う。
② 高齢者 (年2回)	・健康づくりの促進。 ・地域住民（特に若者）との交流の機会をつくる。	・活動しやすい涼しい季節に行う。 ・午前のみ開催。
③ 勤労者 (通年)	・アイスブレイクとして新しい同僚との円滑なコミュニケーションを促進する。 ・香川県の健康アプリ「マイチャレかがわ」と併用し、日常でも継続して行える工夫を取り入れる。	・人事異動の多い春に開催する。  ・通年で行う。

改良案を行政機関に提案したところ肯定的な意見が得られ、現在開催実現に向けて前向きに話し合いを行っている。また、実施エリアに合わせたビンゴカードの改良も行っている。開発コストを考慮し、分割した8エリアではなく、まずは小豆地域を構成する二町ごとの上半期・下半期の魅力に合わせた計4種類のビンゴカードの開発を検討中である。それと同時に、高齢者世代の“交流の機会の増進”に向けた「地域住民との挨拶」など、それぞれの目的に合った行動を誘引するアイコンの検討も行っている。

すでに地域に波及している(2)の有人ゴミ収集所に加えて、地域にこのイベントを浸透させることによって、前述した「理想の小豆島」に近づくと考えている。現在小豆島では、今後5か年で取り組む基本戦略として「サステナブルな観光の推進」を掲げている。私たちが島民の旗頭となり、行政機関と一丸になってこの取り組みを推し進めたい。まずは本研究で示した取り組みについて、長期的な視点で見た運営面についての考察など、行政機関と話し合いを重ねながら実現に向けてさらに進めていきたいと考えている。

## 参考・引用文献

小豆島町役場商工観光課(2021). 小豆島町が「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」に選出されました. <https://www.town.shodoshima.lg.jp/kanko/news/6470.html>

Global Sustainable Tourism Council(2019). GSTC 地域基準. <https://www.gstcouncil.org/wp-content/uploads/GSTC-Destination-Criteria-v2.0-Japanese.pdf>

金石市総務企画部総合政策課(2020). 第2期人口ビジョン・オープンシティ戦略(地方版総合戦略)を策定しました. <https://www.city.kamaishi.iwate.jp/docs/2020051900010/>

3710Lab(2019). 自分のまちの「おさんぽ BINGO」をつくろうプロジェクト! with プンケン. <https://3710lab.com/contents/1637/>

国土交通省(2020). 日本版持続可能な観光ガイドライン. <https://www.mlit.go.jp/kankochou/content/001350848.pdf>

環境省(2017). 大規模イベントにおけるごみ分別ラベル作成ガイドライン. <https://www.env.go.jp/content/900536783.pdf>

小豆島町役場商工観光課(2022). 2年連続で小豆島町が「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」に選出されました. <https://www.town.shodoshima.lg.jp/kanko/news/7742.html>

土庄町(2022). しまいろ 2022 で特集されました. <https://www.town.tonosho.kagawa.jp/gyosei/soshiki/jumin/1/1/2667.html>

一般社団法人 Glocal Academy(2024). 第九回高校生国際シンポジウム報告・アンケート結果. [https://www.glocal-academy.or.jp/\\_files/ugd/c02fe8\\_417be440808e4690b5bfc1900e0d37d7.pdf](https://www.glocal-academy.or.jp/_files/ugd/c02fe8_417be440808e4690b5bfc1900e0d37d7.pdf)

### 企画協力

3710Lab/公益財団法人日本財団/株式会社サン・アド/小豆島町役場/土庄町役場/NPO 法人トティエ/地域おこし協力隊